

## 実践女子大学図書館蔵『苔の衣』（五本）

横 井 孝

『苔の衣』は鎌倉時代の擬古物語作品である。作者は未詳。『無名草子』に記述が見られぬこと、『風葉和歌集』に二首採用されていることから、前者の成立推定年代上限の正治二年（一二〇〇）をその上限とし、後者の成立する文永八年（一二七二）を下限とする時期を『苔の衣』の成立と推定されている。登場人物は三代、設定年代は四〇年余に亘る恋物語であり、四巻ないし五巻に記述される長編の物語である。梗概は『日本古典文学大辞典』（岩波書店刊）をはじめとして、本作品を紹介する近年の著述にはほとんど欠かさず記載されているので、本稿では省略したい。

散逸作品が多い同時代の物語の中ではかなり読者に歓迎されたく、比較的多くの写本が現存する。『國書總目録』に掲載するのをそのまま挙げれば、①国会図書館一〇冊本、②同二冊本、③内閣文庫二冊本、④同（残巻一・二）二冊本、⑤書陵部一冊零本、⑥金沢大三冊本、⑦京都大二冊本、⑧東京教育大四冊本、⑨実践女子大五冊本、⑩同五冊本、⑪東京大一冊本、⑫島原松平文庫（残巻一・四）二冊本、⑬同一冊本、⑭盛岡公民館四冊本、⑮神宮文庫二冊本、⑯尊経閣文庫四冊本、⑰竹柏園文庫四冊本、⑱春海文庫四冊本、⑲穂久邇文庫四冊本、⑳竜門文庫三冊本、㉑旧彰考館文庫本、の計二

一本。『古典籍総合目録』には、②伊達開拓記念館四冊本、が補足されている。また、平成三年（一九九一）十一月十五・十六両日に東京古典会主催で行なわれた「古典籍下見展観大入札会」に未知の江戸初期写四冊本の一本が出品された。同会の目録には、

こけのころも 江戸初期写 鳥の子料紙 粘葉装／表紙紺紙金泥草木絵 見返し金箔貼 四帖

「夏の巻」巻頭少脱文あり。「英王堂蔵書」及び「和学講談所」蔵印あり。

とある（現在のところ売り立て先については不明）。以上に挙げたものの中で現在所在不明のものも含め、さらにこれを一本として加えれば、学会既知の写本は二三部にのぼることになる。

しかし、擬古物語という性格がわざわざいしてか、近代に入ってからいくつかの論考が試みられながらも、本文の紹介は遅々として進まず、かろうじて、

◇尊経閣叢刊『こけ衣』（一九三九年二月刊）……⑯尊経閣文庫本の複製

◇久曾神昇氏校『苔の衣 上・下』（古典文庫、一九五四年四・六月刊）……⑰穂久邇文庫本の翻刻

などがあるに過ぎず、後者において、諸本を穂久邇文庫本系と前田尊経閣文庫本系の二系統に分類する基準が立てられたが、一般に容易に読まれうる状態ではなかった。最近、

◇市古貞次・三角洋一両氏編『鎌倉時代物語集成・第三巻』（笠間書院、一九九〇年五月刊）……⑱内閣文庫本の翻刻

が出版され、ようやく本格的な研究態勢の条件が整いつつあるといえよう。

今回ここに紹介するのは本学図書館の各文庫に分蔵する『苔の衣』五本である。すでに学外にも周知の如く、本学には黒川・常盤松の両文庫をはじめ、山岸徳平博士旧蔵本からなる山岸文庫などの由緒ある文庫を擁して定評があるが、次に示すようにいずれの文庫にも当該作品『苔の衣』写本を所蔵している。

〔黒川文庫〕

- (1) 「苔衣」(巻一題簽による) 五冊本、文庫目録番号「一二八」。
  - (2) 「こけ乃衣」四冊本、文庫目録番号「一二九」。
- 〔常磐松文庫〕

- (3) 「こけころも 一二」一冊零本、整理番号「五九二二六」。

〔山岸文庫〕

- (4) 「こけ衣 全」一冊、書陵部本の写。文庫リスト番号「三三三三一」。
- (5) 「苔の衣」(巻一題簽による) 四冊本、東京文理大学本の写。文庫リスト番号「三三三三二」。

『國書總目録』には「実践(五冊本二部)」「第三卷三九〇頁」と記載されているが、「五冊本」で該当するのは黒川文庫の(1)しか見当らない。あるいは(2)を誤認したものか。『尊経閣叢刊』の別冊解説には「黒川真頼旧蔵本」の他に「山岸徳平蔵本 五冊 題簽に古解具呂裳とあり」(二八頁)とあるが、この五冊本も山岸文庫には見当らず、今のところ不明であり、不審を感じさせる。とすれば、右に触れたような研究情勢からすれば、いまこの五本を紹介するのは何らかの意義があるものと信ずる次第である。

(注) 文芸資料研究所で作成している「山岸文庫リスト」では、「三三三三三」(同文庫登録番号「一九六二七」)に「こけ衣 春」があるが、安田文庫本の翻刻を和文タイプしたもので、巻末の山岸氏の識語に「こけ衣 春一冊 安田文庫本／橘氏借覽臨講時印刷云云／回顧十数年前也／今日綴之、今昔感頻涌者也／昭和卅年大呂昏黃／於高田本町寓居記之／岸廼舎」と墨書されている。本文には山岸氏の筆跡のペン字の書込があり、和文タイプ用紙を綴じた裏にボール紙を補強に当てた、武骨な体裁をしている。当面これを除外しておくが、山岸氏識語を有する点で、同氏旧蔵

本の中でも微小ながらも位置を占めるために付言しておく。

以下、各本の書誌を略記しておく。

(1) 黒川文庫・黒川春村書入五冊本 文庫目録番号「一二八」。以下「春村書入本」と仮称する。

空色紙表紙、寸法・縦二七・三糎、横一八・八糎。中央に青墨流の題簽（一八・五糎×四・一糎）に外題を墨書、「苔衣 一」「こけよろも 二」「古計五呂毛 三」「おまゝころも 四」「苔衣 五終」。第一冊のみ右上端に丸に「物語」の朱印、「春村書入本」と朱書し、さらに右下端にも「共五冊<sup>十七</sup>」（「十七」は墨書）と朱書する。内題は各冊なく、第一冊・第三冊見返し（本文共紙）が剥離して遊紙化したオモテ左上端に小字で「苔衣一」「苔衣三」との墨書がある。

料紙は楮、袋綴。

墨付、第一冊より順に、五四・四八・五四・四一（別に首遊紙一丁）・三九。無辺無界、一面十行に書く。青墨・朱筆の書き入れ・ミセケチなどあり。各冊巻首第一丁オモテ右下端に「黒川真頼藏書」「黒川光隆藏」「黒川真道藏書」の単梓長方朱印あり。第一冊一丁オモテに春村の序が細字で記されている。

此物語ハ建長の頃なと作れりしものとそおほゆる其故ハなそといふに「ことはつかひなといやしきかおほくてそれよりかミにハのほるましくおのつから」おほゆれハそかしそれより下りてもおほえず文永の風葉集に此うちの「歌二首を撰へりそハ風葉集恋五云ひさしうおとし侍らさりける人に五月雨のひま」につかはされ侍りける こけのころもの一品宮おもひやれはれまも見えぬさミたれに」とはて程ふる袖のしつくを同雑一云女のおもひに侍りけるころさかの院へまゐり」けるに色つきわたれる梢を見て 苔のころもの右大将小倉山ミねのもミちはいろ」つきぬなけきのミこそときはなりけり と見えたり上のうたハ此物語の第三<sup>十一</sup>」次のうたも同卷<sup>十六</sup>に見えたり物語中のうたすへて九十

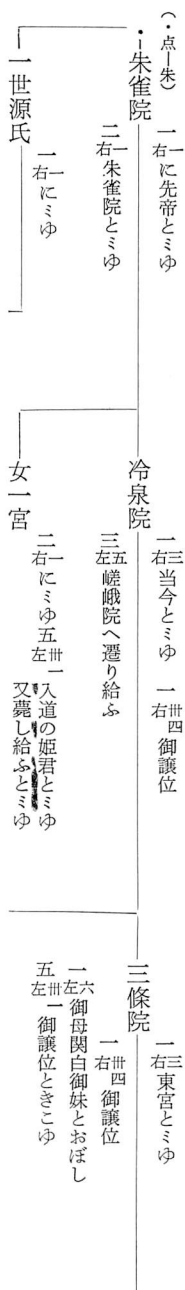


九首<sup>第一に十九首第二に</sup> 第五に十六首<sup>第四に十一首</sup> あるを風葉にハたゝ二首を載たりさて此物語を苔の衣といふハ卷一<sup>右に</sup>逢ての恋も

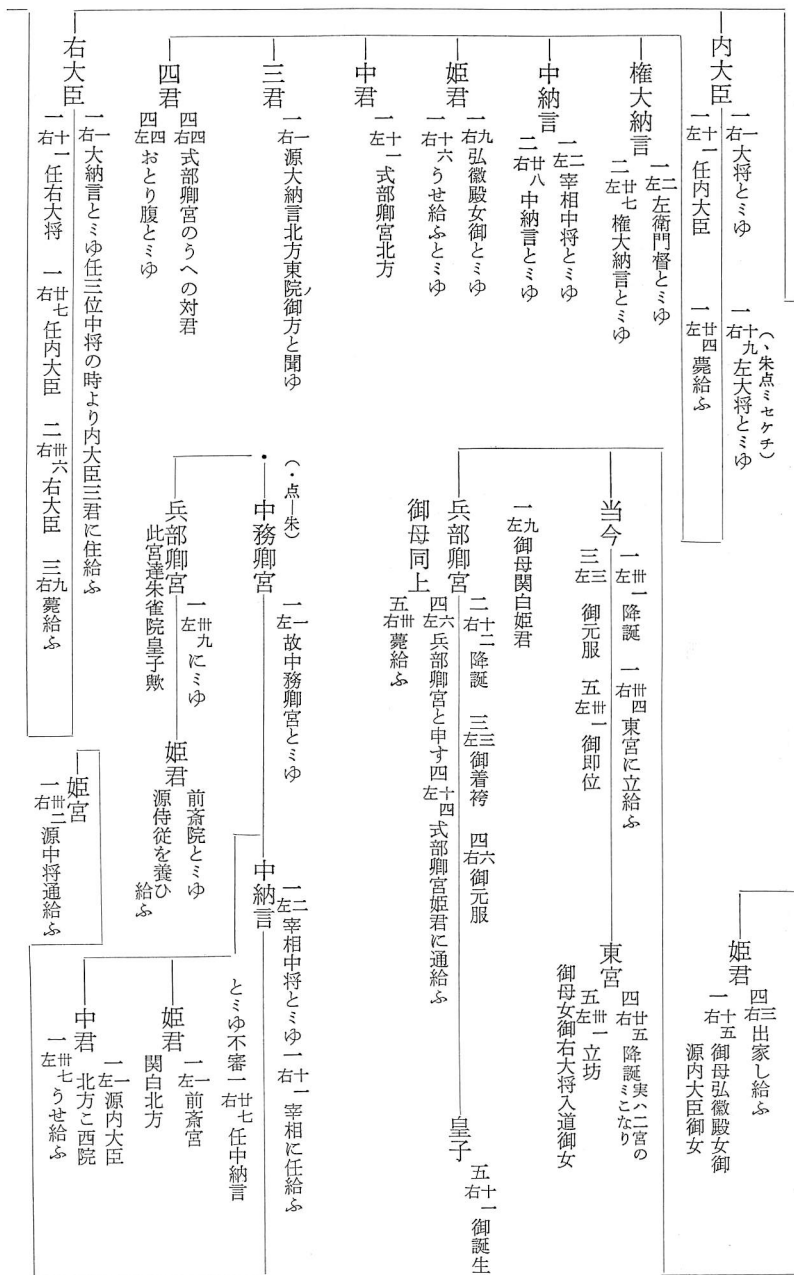
あはぬなけきも人の世にハ さま／＼のおほかなる中に苔の衣の御なからひはかり」あかぬわかれてためしなくあはれる事ハなかりけり又卷三<sup>五十六</sup>に山おろしのけはしきに」苔をころもとして風をふせきてのミ過侍る云々綾羅繡にも苔の衣草のまくらハこよなく」かへまさりに侍りぬへけれハ菜つミ水くミてもかの世界へ参り侍らんこそ年ころのねかひにて」侍らめとていとくちをしとおほしたる御けしきハいひしらすめてたく見奉れハれいのさほうニ」とりまかなひてやつしはて給ひぬれハしうせんのかの衣き給ふとて色々にたもとを」今ハとて苔のころもにたちそかへつるとそなかめられ給ふ云々とあるによれり既に」いへることく詞つかひなとハ無下に後さまなるところ／＼も見ゆれとさハいへと一部の作意ハ」頗あはれにかけりしものなりさて系図をもおろ／＼するしいふへし

以下、一丁ウラから二丁ウラにかけて系図を付し、系図末尾に「右ハ一読のついでに大概をしるせるなれハ猶不審のすち／＼おほかり他日なほ再考／芳蘭(花押)」という注記をする(「芳蘭」は春村の号)。この系図は『尊経閣叢刊』の解説にある系図と同じものだが、それは「帝國図書館蔵本の書入その他を参考」した由であり、現国会図書館蔵の一〇冊本を安政六年(一八五九)の写とする奥書に従えば、春村の晩年(慶応二年・一八六六)と相前後するもの、おそらく該本が上流に立つものであらう。

比較対照の便に、いま系図の一部を掲げておこう。



以上、一丁ウラの分を掲げてみた。



また、第五冊・三九丁オモテ左上端に貼紙して、

校合本

塙氏藏書奥書

右四冊正敷元本令借之

写之畢不可有他見者也

天和元年仲秋吉日

という校合本奥書を記す。『尊経閣叢刊』の解説では諸本を四卷本・五卷本の二系統に大別し、五卷本として「黒川真頼氏旧蔵本」「佐佐木信綱氏蔵本」「帝国図書館蔵本」「彰考館蔵本」「山岸徳平氏蔵本」の五本を挙げているが、いずれも伝流上かなり近い関係にあるものと思われる。彰考館本は戦火に罹災して現存せず、佐佐木信綱蔵のいわゆる竹柏園本も行方が不明のごとくだが、上記の『尊経閣叢刊』解説によれば、

奥書によれば藤尾景秀なる人が黒川春村所蔵の本を以て書写し、後塙家所蔵の本（上田万年蔵本とは別の本）を以て校合したもの。塙本は四冊の本でその奥書は、

右四冊正敷元本令借之写之畢不可有他見者也

天和元年仲秋吉日

とある。塙本校合は竹柏園本の段階でなされたものではなく、竹柏園本は既に校合された春村書入本を奥書ごと書写したのであり、春村書入本が親本であることが明らかなのである。

その他該本に直接関わる識語等は見えないが、各冊末尾に細字でその冊内の歌数を記す。これも第一冊より順に挙げれば、第一冊五一丁オモテ最終行下端に「歌員十九首」、第二冊四七丁オモテ「歌員十七首」、第三冊六二丁ウラ「歌員三十六首」、第四冊四一丁ウラ「歌員十一首」、第五冊四〇丁オモテ「歌員十六首／惣計九十九首」とある。本文中、和歌は一

行二字下げにして地の文に続け書きにする。

(2) 黒川文庫・「こけ乃衣」四冊本 文庫目録番号「一二九」。便宜「黒川四冊本」と仮称する。

第一・二巻は打曇りに唐獅子に石橋と「石橋」の散らし文字表紙、第三巻は打曇りに千鳥・若松文表紙(裏表紙には五七桐も)、第四巻は打曇りに菊花・五七桐・桜花並び文表紙。寸法、縦二六・〇糎、横一九・五糎。中央に金銀箔散らしの題簽(二三・六糎×三・一糎)に外題を墨書、「こけ乃衣 一(一四)」。第一巻右上端に丸に「物語」の朱印、「異本」と朱書する。内題は各巻なし。

料紙は楮、袋綴。

墨付は、第一巻・五二丁(その他に首遊紙二、尾遊紙一)、第二巻・四八(首遊紙一、尾遊紙一)、第三巻・五九(首遊紙一、尾遊紙二)、第四巻・七〇(首遊紙一、尾遊紙一)。ただし遊紙としたものの多くは、表紙に貼付した見返し用紙の剥離したものと認められる。無辺無界、一面十行に書く。朱筆・墨の書入れ・ミセケチなどあり。各冊巻首第一丁オモテ右下端に単枠長方「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」、丸形印「黒川／真頼」などの朱印あり。第四巻裏表紙見返し左下端に「筒井藏書」の朱円印あり。

和歌は一行二字下げにして地の文に続け書きにする。朱筆の書入は少なく(全六例。巻一、五オ③④行目の合点・区切れ記号、九ウ⑧「いかなるきよく」の「く」をミセケチにして「ら」と振る、巻四、三七オ①行頭に「一本みや云々／ヨリ五巻トス」と割注二行書、同行に段落の区切れ記号)、墨によるミセケチ・修正箇所が多い。また、小紙片を本文の脇に貼付して修正部分を示す方法を採用する箇所も少なくない。以下、その実例を挙げておこう。なお、剥離して丁の間に挟まっている例もいくつかあるが、本来貼付されていたとおぼしき部分が判断できる場合には、しかるべき位置を示しておくことにする。

〔第一卷〕

- 1 一七ウ④ なつかしきかなとひとりうちて……  
 2 二〇ウ⑨ ひとくにかつけ物しなくなり……  
 3 三四オ⑦ さいるんの上々の春のころより……  
 4 三四オ⑧ れいの御事にやとおほかすさはなくて  
 5 三六オ⑥ おほつかなくてすゝしつらんよと……

〔第二卷〕

- 10 一オ⑦ けいし給まことにゆるしとおほしたる  
 11 三ウ⑨ 内にもなをとくとまいらせへきよし  
 12 五ウ⑤ つかうまつりつるにたりふれにて……  
 13 二一オ⑩ のたまひたるにあしたとのなけれと

〔第三卷〕

- 17 五ウ④ ねひとゝのふにしたまひて  
 18 八オ⑤ きんたちのはゝ／とも らうたけに……

- 6 三八オ④ みたまふに弓の心ちし……  
 7 四〇オ⑦ この程のたまへもさすかに……  
 8 四六オ② おかしくひたいたる中に……  
 9 二四ウ② 二五オ なつかた（剝離）

- 14 二四ウ④ ……なりて／はしもかけとゝめ……  
 15 二六オ⑦ ふきたまへる／千よりハしめて……  
 16 三二オ① きしにもたかひて……

- 19 一一オ⑩ みかとわたらせたまへハさうのこと……  
 20 四三ウ④ いとゝなにならさまむと……

21 四六ウ② …すまひにていゑミ／たてまつるまし

22 五〇ウ④ おひへてミちおとろき給ひて……

23 五一オ② うちなかれぬ程も人ぬれハ……

〔第四卷〕

27 三ウ⑨ しき／きやうのミヤのうへに……

28 一五ウ⑥ まさるつくもなき御氣しき

24 五五オ④ いくへもまちなん

25 26 四九ウゝ五〇オ ま ぬ (剝離)

29 六〇ウ③ かたらひたまふによわくなりはて……

30 四〇ウゝ四一オ し (剝離)

以上、紙片の貼付による本文修正箇所は三〇。直接の書入などを含めれば、稿者の数えるところではおおよそ一七九箇所  
所に及び、例えば、第一卷五丁ウラ8行目「殿はかりなく」は、「か」の上に「ハ」を重ね書きしてさらに右に「ハ」を  
傍書したものであり、同卷二五丁オモテ4行目「上も頼而さまかへ給ふわくかたなくて」の「給」は、もともと「そ」と  
あったのを鋭利な刃物で紙面を削り取り、その上に「給」と記したものである。いずれもその懇切な態度に表されている  
ように、ほぼ妥当な修正結果をもたらしていると思われることができる。本文は穂久邇文庫本の系統に属するようであるが、  
後に検討したい。

(3) 常磐松文庫・一冊零本 整理番号「五九二一六」。以下「常磐松本」と仮称する。

朽葉色布目紙表紙、寸法、縦三一・〇糎、横二〇・七糎。中央に題簽（二〇・三糎×三・八糎）を貼付し外題を墨書、  
「こけころも 一二」。虫損・湿汚の痕がある。内題なし。

料紙は楮、袋綴。

墨付、六八丁。但し、三五丁ウラ7行目まで卷一相当の本文を記したのち空白にし、次の三六丁を表裏とも白紙のままとし、三七丁より「とのゝ中納言内へまいり給へるに…」と第二卷冒頭本文を書き出す。首遊紙・尾遊紙各一丁を有す。無辺無界、一面十二行に書く。墨の書き入れ・ミセケチなどあるが、朱書・貼紙なし。首遊紙オモテ右上に単郭方形陽刻「芸叢ノ之印」の朱印。一丁オモテ右下に単郭長方形陽刻「三袖書屋」の朱印。六八丁ウラの本文末尾、左下に菱形陰刻の「芸／叢」の朱印、方形陽刻「豊蔀／家庫」の朱印あり。奥書等なし。

和歌は一行二字下げにしてほぼ書き終えるが、地の文に続け書きすることもある。朱書はないが、墨による修正・補入がある。修正箇所多くは、鋭利な刃物で誤記部分を削り取り、その上に記したものであり、以下にその実例を目に入る限り挙げておこう。

- (1) 四オ① 僧<sup>も</sup>にも御い／のりの事…… (「と(も)」ヲ削り「僧と(も)」ヲ重ネ書キスル)
- (2) 四ウ⑧ 姫君の御はかまき (「に」ノ上ニ「の」ナゾリ書キ)
- (3) 五オ⑪ あなつらハしからず (「ら」ノ上ニ「な」ナゾリ書キ)
- (4) 六オ⑥ おはするをこゝろもとなく…… (「る」ナゾリ書キ)
- (5) 九ウ⑦ 殿のうへも聞給ひて…… (「ふ」ト書キサシテ「ひ」トナゾリ書キ)
- (6) 一一オ⑩ さてのミすぎ給へは僧とも…… (「ふ」ヲ削り「へ」ヲ重ネ書キ)
- (7) 一二ウ⑦ かしつき給はかなく…… (「へる」ヲ削り「は」ヲ重ネ書キ)
- (8) 二三オ③ よ所のミおもし物をあかつきの…… (「に」ヲ削り「は」ヲ重ネ書キ)
- (9) 二三オ⑥ 御つかひの禄なとめやすきさま也 (「け」ヲ削り「と」ナゾリ書キ)
- (10) 二四ウ④ いわけなき程なれと…… (「に」ヲ削り「な」ヲ重ネ書キ)

(11) 二八オ⑨ 雪とふるころはしらすとハてのミ過るたへまは……

(12) 二九オ③ ひめ君ハちいさき…… (「姫」ヲ削リ「君」ヲ重ネ書キ)

(13) 三〇ウ③ めつらしさには。<sup>おろかにへ</sup>をほされんやハ……

(14) 三二オ② ……へくや有とてや。<sup>を</sup>らいりて……

(15) 三三オ③ きこゆれはおほつかなくて…… (「か」ヲ削リ「つか」ヲ重ネ書キ)

(16) 四一ウ⑩ ……せさせ給ひて…… (「ぬ」ノ上ニ「給へぬ」トナゾリ書キ)

(17) 四三オ⑪ なへてならぬすみつき筆の…… (「なた」ノ「た」ノ二筆目ノ上ニ「ぬ」字母・怒)ヲ重ネ書キ)

(18) 五一オ⑦ 誠にかなひかたくおほされ…… (「かね」ト書キサシテ削リ「かた」ト重ネ書キ)

その他、濁点の例もいくつか見えるが近世の写本としては特筆する必要もあるまい。本文は前田本系統に属すると思われるが、これも一括して後に検討したい。

(4) 山岸文庫・「こけ衣 全」一冊 文庫リスト番号「三三三一」・文庫登録番号「一九六二二」。便宜「山岸文庫一冊本」と仮称する。

縹色紙表紙、寸法、縦二四・五糎、横一六・七糎。左肩に双边の刷り題簽(一七・〇糎×三・五糎)を貼付し、「こけ衣 全」と外題を墨書する。内題なし。

料紙は楮、袋綴。

墨付、六〇丁。印記は一丁オモテ左下に「山岸文庫」の長方朱印。但し右上に親本の印記にかたどり、「帝室／圖書」と朱書する。五八丁ウラの本文末尾に「岸廼舍蔵」の複枠長方六角朱印。巻一のための零本である書陵部現蔵本の手写本である。巻末に山岸氏の奥書・識語がある。



大正十四年十月三日高野孫三郎氏

於鎌倉書寫畢

原本宮内省圖書寮藏寫本也

岸廼舎記

苔衣 四卷

本書其第一卷也

「(五九ウ)

内閣文庫本 二部

一、昌平坂學問所本 二冊 卷二、三欠

二、和學講談所本 二冊 春夏秋冬

奥云

右四冊正敷元本令借之寫之早不可有他見者也

天和元年仲秋吉日

「(六〇オ)

和歌は二字下げ二行書き、二行目をさらに半字分ほど下げる。上欄外、細字の書込若干あり。本文の修正・傍書・補入なども巻頭付近にわずかに見える。本文は前田本系統に属する。

(5) 山岸文庫・「苔の衣」四冊本 文庫リスト番号「三三三二」・文庫登録番号「一九六二三」・「一九六二六」。いま便宜的に「山岸文庫四冊本」と仮称する。

渋引表紙、寸法、縦二七・三糎、横一九・六糎。左肩に双边の刷り題簽（一八・六糎×三・九糎）を貼付、第一巻から順に「苔の衣 春」「こけの衣 夏」「苔の衣 秋」「おけの衣 冬」と外題を墨書する。各巻扉あり、その中央に内題を記す。これも第一巻から順に「おけの衣 春」「おけの衣 夏」「苔の衣 秋」「おけの衣 冬」。

料紙は斐、袋綴。

墨付は、春・五七（尾遊紙一）、夏・五〇（尾遊紙一）、秋・六六（尾遊紙三）、冬・七四（尾遊紙一）、各冊に扉紙一。題簽の右上端、扉の右裾に「山岸文庫」の朱印がある。書入など朱筆は春・夏の二巻、秋・冬は墨書のみ。冬の巻末に山岸氏の識語がある。

苔乃衣 四巻 以東京文理大藏本令書寫

夏冬二冊黄鐘中浣寫了 春秋二冊同下浣

写了

内閣文庫本

一、林家旧藏本二冊卷上之末、下之本欠巻也

二、和学講談所本二冊

奥云

右四冊正敷元本令借之寫之 不可有他見者也

天和元年仲秋吉日

和歌は二字下げ二行書き、二行目をさらに一字ほど下げる。識語にあるごとく「東京文理大藏本」の写であり、本文は前田本系統に属する。虫損の痕まで写しとどめた丹念な仕事ぶりを見ることができ。

さて、以上の書誌的事項の中に、行文の都合上すでに本文系統について触れてきたが、ここで一括して実践女子大学の所蔵本の本文を検討してゆこう。なお、山岸文庫の二本は現写本であることが明らかであり、かつその親本がそれぞれ現

存しているので、今回の検討からは除外しておきたい。

『國書總目録』等で知られる写本が二〇余本、さらに今回紹介に及んだ実践女子大学藏本のうち「常磐松本」を含めた諸本が現存すると考えられる訳だが、そのほとんどが江戸期の写本であり、ひとり穂久邇文庫本のみが「室町時代中期永正頃の書写」（古典文庫『苔衣物語 上』解説、久曾神昇氏）と推定されており、さらに残りの本の中でも比較的古いと看做される前田尊經閣文庫本と併せて、これを基準として諸本の系統分類がなされてきた。かつて「穂久邇文庫本なるものは、前田本系の本文に注釈的敷衍的改作をほどこして生まれた」（今井源衛氏「王朝物語の終焉」『國語と國文學』四巻一〇号、一九五四・一〇）と評されたことがあるが、近年では「前者（穂久邇文庫本）は本文的にすぐれている点が多いと見られるものの、中には冗長に引き延ばした表現かと疑われるところも少なからずある。近世の写本の大部分は後者（前田本）の本文を有しており、前者にくらべて本文節略の傾向が顕著ではあるが、一概に優劣を定めがたいところがある」（市古貞次・三角洋一両氏編『鎌倉時代物語集成・第三巻』笠間書院刊）という慎重な読みが求められている状況である。本稿もまた、これら通説となりつつあるこの二系統分類に従う（巻三のみが独立して『宇治大納言物語』と呼称する続群書類従本などの一群については、当面これを除外する）。

#### (1) 黒川文庫「春村書入本」

「春村書入本」のような五冊本が四冊本の第四巻を二分割して成ったものであることは、現在のところ異論はない。四冊本の各巻の末尾が「……とぞ」という形式で統一されているのに対して、該本巻四が「かきつむるその水くきを見るたひにおき所なかなしさをます」（四一〇〜四一ウ）という歌でふつりと閉じられるのは、やはり不自然とせねばなるまい。また、五冊本が前田本系統から派生した形態であることもすでに評価が定まっており、該本もその域外に出るものではないと思われる。次に、巻一で穂久邇文庫本・前田本と対比したものを表示してみよう。穂久邇本は古典文庫の翻刻

に依拠しつつ、異本の校合は省略する。前田本は読点を補い、黒川本は春村の書入をも示しておくことにする。

〔表一〕

穂久邇本	前田本	黒川文庫「春村書入本」
<p>まことやくはんばく殿には、ひめ君はおはすれど、わか君はおはせざりけるを、こゝろもとなくおほしわたりしほどに、たまひかるばかりのわか君、<sup>(b)</sup>いまだふたばよりさまことにひかる源氏のちごおひもこれほどにはなくやとおほゆる人えたまひて、またなくかしづき給さま、こちたきまでなり。<sup>(c)</sup>北の方こゝろうるはしくおはする人にて、此大納言殿のうへをおろかならずもてなしきこえ給へば、よのおほえもゆゝしくぞおはする。かくて殿の姫君八に成給へば、なつたはかまぎ有て、やがてとう</p>	<p>まことやくわんはくとのにはひめきみはおはすれとわかきミのおはせざりけるを』(3ウ)こゝろもとなくおほしわたり給に、たまはかりのわかきミに<sup>(a)</sup>いてき給、またふたはよりさまことに光源氏のちこをひもかほとにはあらしかしとおほゆる人えたまひて、又なくかしづき給さま、こちたきまでなり。<sup>(c)</sup>御心うるハしくおはする人さまにて、此大納言殿のうへともをろかならずもてなしきこえたまへは、よのおほえもゆゝしくそおはするかくてとのゝひめきミ八になり給へば此夏比御はかまきありて、やかてとう</p>	<p>まことや、関白殿にハ、姫君ハ<sup>は</sup>おわすれと、わかきみのおはせざりけるを、心もとなくおほしわたり給ふに、たま<sup>(a)</sup>もはかりのわかきみそいてき給ふ、またふた葉よりさまことに、光源氏のちこを<sup>お</sup>ひも、かほとにハあらしかしとおほゆる、人、えたまひて、又なくかしづき給ふさま、こち』(5オ)たきまでなり。<sup>(c)</sup>御心うるハしくおはする人さまにて、この大納言殿のうへともおろかならずもてなし聞給へハ、よのおほえもゆゝしくそおハする、かくてとのゝひめ君八に成給へハ、此夏頃御はかまきありて、やかてとう宮へ</p>

ぐうへとおぼしめす。大なごん殿に  
は、<sup>(d)</sup>  
ひめ君のおはせぬことをはへなくお  
ぼして、宮の御かたひとりぐしきこ  
えて石山へ参給ふ。……(上・五頁)

くうへとおほし」(4オ)たり、大納言  
殿には、<sup>(d)</sup>わかきミたちハ物し給へと、  
ひめきミのおはせぬことをはへなきこ  
とくおほして、宮の御かたひとりぐし  
きこえ給ふていしやまへまいり給、…

とおほしたり、大納言にハ若きミたち<sup>(d)</sup>  
ハ物し給へと、姫きみのおはせぬこと  
を、はへなきこととおほして、宮の御  
かたひとりこしきこえ給ふて、石山へ  
まいり給ふ、……』(5ウ)

そもそも穂久邇文庫本・前田本の両系統ともさほど本文に相違があるわけではないが、右表で両系統の差異の状態を推察することができるだろう。相違点を(a)から(d)まで挙げてみたが、穂久邇本の(a)(c)が前田・黒川の両本になく、また後者の(b)(d)が前者にないという共通点を見出すことができ、他の部分においても同様な傾向を見ることができるのである。冗漫になるのを避けて別の箇所を例示するのを控えておきたい。「春村書入本」を前田本系統と認定するのに不都合はあるまい。なお、前田本に「ママ」を付した箇所は単純な誤写と判断してよからう。同系統の内閣文庫藏天和元年書写本(函架番号、二〇三—八二)では、それぞれ「わか君そいてき…」(3ウ)、「はえなき事とおほして…」(4オ)とあり、「春村書入本」と一致する。

## (2) 黒川文庫「黒川四冊本」

該本についても如上のごとき方法で検討してみよう。

卷二、帝は故西院の上の姫君に執心だが、なかなか入内が実現しないのに業を煮やしてその兄・中将を介してひそかに歌を送る。中将がその文をもたらしした時の姫君の状況を描く場面である。

〔表二〕

穂久邇本	黒川四冊本	前田本
<p>①しきしのふみのすゞりのかたはらに おしやられたるを「いづくよりか」と おぼ②つかかなげになづね給へば、さき のさい宮よりたてまつり給たりつる にこそ。あはれにむかしの御ゆかり とて、よくつねに申しかよはし給ふ に、③</p> <p>「したしき御④よすがだになども いますこしものし給ざりけん」と、 つきせずいへるも⑤ あはれなり。(上・九一―二頁)</p>	<p>①しきしのふみのすゞりのかたはらに おしやられたるを「いづくよりか」とお ぼ②つかかなげに尋給へば、さきのさい宮 よりたてまつり給たりつるに③(6才) こそ、あはれにむかしの御ゆかりとて よくつねに申かよはし給ふに、④</p> <p>「したしき御④よすかになるも いますこし物し給はさりけん」とつき せずいへるも⑤ あはれなり……』(6ウ)</p>	<p>①しろきしきしのすゞりのかたはらにを しやられたるを「いづくよりか」と たつね給へば、さきの斎宮よ りたてまつり給たりと聞ゆるも、あは れにむかしの御ゆかりとて、かくつね にのたまひかハし給ふよ、③とうちなか めて、しはしやすら』(7ウ)ひたまへ と、ことにつましましけにて物もきこえ 給はねは「したしき御④なからひといへ と、かく浅ましきまでへたてたまへる はつらく侍るかな」とうらミ給もいと あはれなり……』(8才)</p>

なるべく異同の大きいところを選んでみたが、表示される通り、その相違は一目瞭然というべきである。穂久邇本と黒川本に共通する(1)(4)が前田本では別文であり、前二者が有する(2)を後者はなく、後者に見える(3)(5)

は前者にはない。前述のごとく、「黒川四冊本」は穂久邇本系統に属すると看做しうる。

なお、先に該本には墨によるミセケチ・修正箇所が二〇〇足らずと少なくない由に触れたが、それらを概観するに、異本の校合というよりも誤写の修正であることは、小紙片が示しているところであった。その他、例えば一ウ4行目「ならふ人なく。おわす<sup>て</sup>」、五オ2「みもしはてしをと<sup>て</sup>なん」、七ウ6「事に<sup>へ</sup>にみえ給ふ」、一一ウ1「春宮さ<sup>ね</sup>めに女御の」等々の類と考えて大過ないと思われる。

(3) 常磐松文庫「常磐松本」

これも巻二、「表二」に続く場面から採り上げてみよう。

〔表 三〕

穂久邇本	前田本	常磐松本
<p>御ふみ引ときてちかくよりてみせきこえ給へど、かほうちあかめて<sup>(ア)</sup>しありげもみへぬを、さればよと中将はくるしくおほ<sup>(イ)</sup>せば「おろかならず侍りつる御きそ<sup>(ウ)</sup>くに、むなしくてかへり侍らん事などいとわびしく<sup>(エ)</sup>とたび／＼申給。「げにさのみしらぬさまならんもひんなかりぬべし」</p>	<p>御文引ときてちかくよりて見せ聞え給へと、かほうちあかめて<sup>(ア)</sup>御返きこへ給へき氣しきも見えぬを、されハよと中将はくるしくおほ<sup>(イ)</sup>して「をろかならず侍りつる御きそ<sup>(ウ)</sup>を、むなしくてかへり侍らん事いとわひしく侍<sup>(エ)</sup>る」とたひ／＼申給、「けにさのみしらぬさまならんも、ひんなかりぬへし」とて、</p>	<p>御文ひきときてちかくよりてみせ聞えたまへと、かほうちあかめて<sup>(ア)</sup>御返きこえ給ふへきけしきもみえぬを、されはよと中将はくるしくおほ<sup>(イ)</sup>して「おろかならず侍りつる御<sup>(ウ)</sup>」(39ウ)きそ<sup>(ウ)</sup>を、むなしくてかへり侍らん事いとわひしく侍<sup>(エ)</sup>る」とたひ／＼申給「げにさのみしらぬさまならんもひんなかるぬ<sup>マ</sup>へし</p>

とて、ふて<sup>(オ)</sup>などとり給つゝ、をしへ  
たてまつりてかゝせきこえ給ひたる  
もじやうい<sup>(カ)</sup>かでかくしもとりあつめ  
ておひいで給ひけんと、さきの世ゆ  
かし<sup>(キ)</sup>う……  
(上・九二〜三頁)

ふて<sup>(オ)</sup>とりまかなひつゝをしへたてまつ  
りてかゝせきこえ給へたり、もしやう  
す<sup>(カ)</sup>みつき、いかて』(8ウ)かくしもと  
りあつめておひ出給ひけんと、さきの  
よゆかし<sup>(キ)</sup>……

とて<sup>(オ)</sup>筆とりまかなひつゝをしへたてまつ  
りてかゝせきこえ給へたり、もしや  
う<sup>(カ)</sup>す<sup>(カ)</sup>みつき、いかてかくしもとりあつ  
めておひ出給ひけむと、さきの世ゆか  
し<sup>(キ)</sup>……

この場合も、みごとに「穂久邇文庫本」対「前田本・常磐松本」の本文分立を看取することができる。(ア)のようなかなり大きな異同の部分はもちろん、(イ) (ウ) (エ) (キ)のような微細な表現まで一致することは、系統分類の指標として興味深い。このようなわずかではあっても際立った対立があることは、現存諸本の成立する以前のかなり早い段階で穂久邇文庫本系統と前田本系統とが派生・分立したことを示唆するものであろうか。そういえば、現存諸本中最も早く書写されたと思われる穂久邇文庫本自体が、すでに前田本系と思われる朱書の校合本文を有していたのだった。側聞するに、一九五〇年代の半ばにはすでに『苔の衣』の校本作成が試みられ、最近また現存本を再調査、網羅するかわちで校本が作られつつあるという。そうした作業の過程で、諸本の整理、両系統の本文派生のメカニズムが明らかになることを期待したいものである。

最後に、『苔の衣』のような鎌倉時代物語が物語史にどう位置付けられるか、簡単に触れておきたい。  
この物語が著名な先行作品——とりわけ『源氏物語』『狭衣物語』『寝覚物語(夜の寝覚)』を積極的に摂取しているこ



とはすでに多くの先学に指摘されている（神野藤昭夫・豊島秀範などの諸氏に研究史の論がある）。また、「鎌倉時代後期の作品と考えられる『小夜衣』『兵部卿物語』は、いずれも主人公が兵部卿宮で、本物語の影響が見られる」（『日本古典文学大辞典』岩波書店刊）ともいう。鎌倉時代の物語たちが範を王朝のただ中に華ひらいた作品群に求めたように、時代が下があればその物語たちもやがて新作の物語の目標となる、文学史的循環というべき物語史の展開である。

かつて、鈴木一雄氏は、『源氏物語』以前の物語が古代の伝承を基層として、むしろ伝承の枠を利しつつ形成・成立したことを述べ、さらに『源氏物語』以後——後期物語の伝承性とその基層についてこう論じたことがあった。

後期物語の伝承性は、ほとんど基層とは言えない。それは、物語内部における必然性を失いながら断片的に残存するに過ぎない。古伝承的基層の断片化に代わって、大きい拠り所になったのが『源氏物語』という目前に輝く先行の物語であった。『源氏物語』は以後の物語にとって、まさに第二の基層部となったのである。おおまかにいえば、これ

こそ『源氏物語』の影響といわれるものの意味であろう。（『堤中納言物語序説』桜楓社、一九八〇・四刊、六一頁）

鈴木氏のいう「古伝承的基層」の上に物語が試みられたのを第一段階、さらに『源氏物語』そのものが基層の中に組み込まれて『狭衣物語』『寝覚物語』などの後期物語が成立した段階を第二と数えるならば、この後期物語までも基層に組み入れた『苔の衣』のような作品は、物語史の第三段階と把握すべきだろう。夙に指摘されているように、本作品の開巻冒頭の——

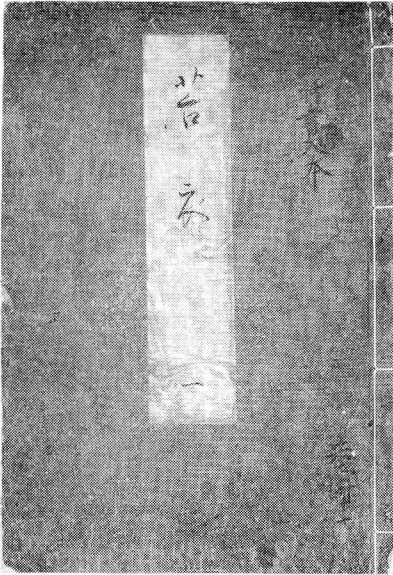
あふての恋もあはぬなげきも、人の世にハさま／＼おほかる中に、こけのころもの御なからひばかりあかぬわかれま  
でためしなく、あはれなる事ハなかりけり。此比権大納言ときこゆるハ、こせんていの御おとうと、一世の源氏とき  
こへし二らう、大しやうの御おと／＼ぞかし。

（黒川四冊本による）

の一文が、『寝覚物語』の「人の世のさま／＼なるを見聞きつものに、なほ寝覚の御なからひばかり、あさからぬ契りな

がら、よに心づくしなる例は、ありがたくも有けるかな」に依拠しつつ、『源氏物語』の面影を点綴しているのに象徴されるように、ここでは後期の物語すらがもはや踏まえるべき基層として機能しているのである。『日本古典文学大辞典』がいうごとく、物語史の第三段階に立ち至った『苔の衣』を下敷きにする作品があったとするならば、史的展開として第四の段階が用意されていた、ということになろうか。しかし、第二段階までがかるうじて持ち得ていた古代の伝承性は、もはやここでは完全に形骸として遺るに過ぎない。〈物語〉という、古代文学としての文学形態が伝承性を喪失した時、その行くては困難な道があるばかりである。『苔の衣』は、そうした険しい道程の崖ふちに立った、〈物語〉の残光に映える一作品というべきではないだろうか。

(春村書入本・第一冊表紙)



80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

(春村書入本・第一冊一ウ・二才)

<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>
<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>
<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>	<p>春村書入本 第一冊一ウ 二才</p>

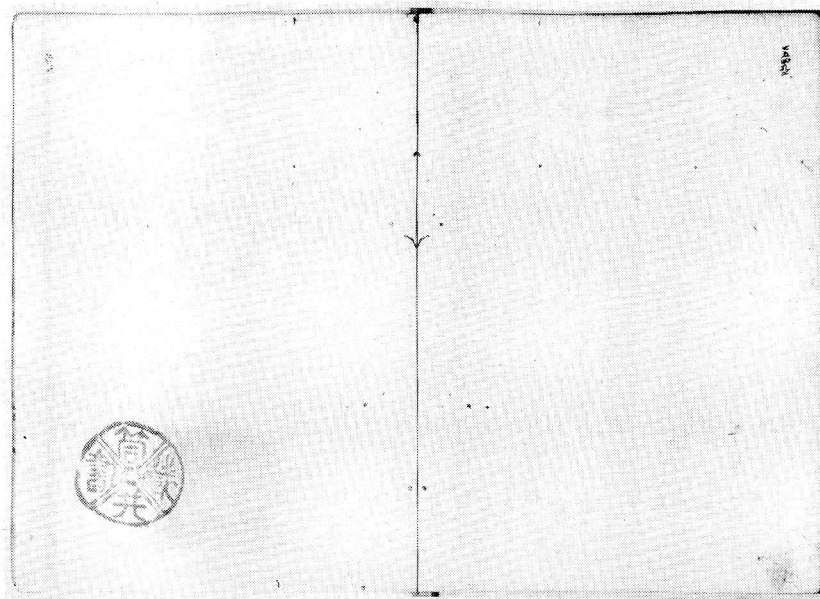


二口衣 名 格

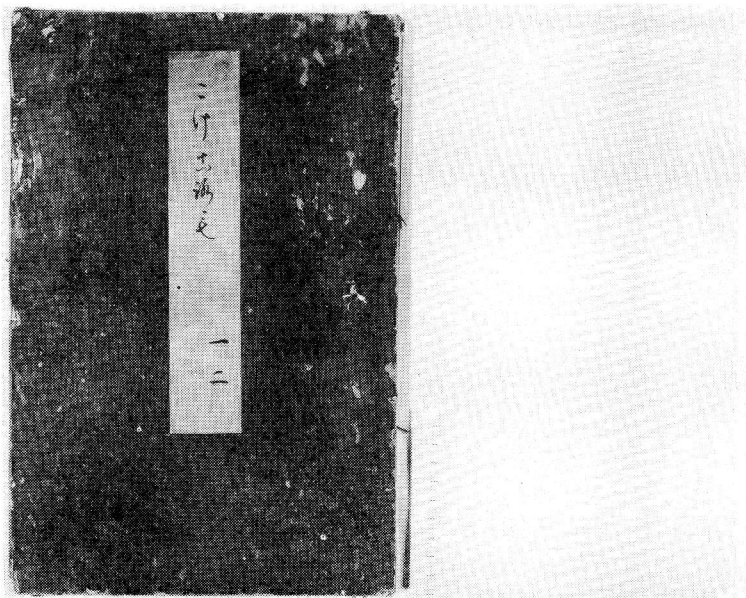
ちかあるはむの雨降りそくは地よりあ  
 しいふよたきこもたふとくまこつゆ  
 涙なりかとは雲をいづあなかりなるる  
 どつれいさのきつこふひなすといは  
 りききあるはむともてうつくしきあり  
 はるゆめやみくろあくむせつれきふて  
 くらけふにほこさあふよき一ふきもほこ  
 きふたせや路をいふとけくわよりせそ  
 ちかてふらあふくちありけとてふれ  
 なるまはるもたせてあつちきりつゆ

[illegible]

(黒川四冊本・第四冊裏表紙見返)



(常磐松本・表紙)







大正十四年十月三日高野孫二郎氏  
於鎌倉書寫畢  
原本宮內省圖書寮藏寫本也  
岸廼舍記

昔乃衣四卷  
本書其第一卷也

内閣文庫本二部

一、昌平坂學問所本 二冊 卷三三 欠  
二、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
三、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
四、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
五、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
六、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
七、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
八、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
九、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠  
十、和宮傳抄所本 二冊 卷三三 欠

昔乃衣四卷 以東京文理大藏本全書寫畢  
夏冬二冊 黃鐘中阮寫了 春秋二冊 二冊同阮

内閣文庫本

一、林氏出藏本 二冊 卷上末 下末 欠卷  
二、和宮傳抄所本 二冊  
三、和宮傳抄所本 二冊  
四、和宮傳抄所本 二冊  
五、和宮傳抄所本 二冊  
六、和宮傳抄所本 二冊  
七、和宮傳抄所本 二冊  
八、和宮傳抄所本 二冊  
九、和宮傳抄所本 二冊  
十、和宮傳抄所本 二冊



# 『本朝麗藻』『苔の衣』訂正

調査報告二十六 山岸文庫本『本朝麗藻』（「年報」第九号所収）・調査報告三十三 実践女子大学図書館蔵『苔の衣』（五本）（「年報」第十一号所収）につき、次のように訂正致します。

訂正箇所	誤	正
第九号 七六頁3行目	楮紙渋引表紙	楮紙刷毛目渋引表紙 ***
第十一号 一二八頁4行目	「三袖書屋」の朱印。	後に「川瀬一馬氏旧蔵 *** 本」と補記。

関係各位にご迷惑をおかけしました。お詫び致します。（横井 孝）